

特別講演 2

「2025－2026 シーズンの COVID-19 診療」

大阪大学大学院医学系研究科 感染制御学教授

忽那 賢志 先生

2025-2026 年シーズンにおける COVID-19 診療は、流行株の変化、抗ウイルス薬の適応、ワクチンによる予防戦略を踏まえたアップデートが求められる。本講演では、まず最新の流行状況として、LP.8.1 および NB.1.8.1 系統を中心とするオミクロン系統の動向を紹介する。これらの株は感染力が高い一方、重症化率は比較的低下しており、診療の重点が変化していることを論じる。

次に、治療の現状として、発症早期における抗ウイルス薬（ニルマトレルビル・リトナビル、モルヌピラビル、レムデシビル、エンシトレルビル）の使い分けと、重症化後における抗炎症薬（デキサメタゾン、トシリズマブ等）の適応判断について解説する。特に、重症化が発症から数日以内に急速に進行することがあるため、迅速な診断・治療介入が重要である。

最後に、予防の柱となるコロナワクチン接種については、2025-2026 シーズンのコロナワクチンの対応株について解説し、これまでのワクチンの研究に基づいた接種後の重症化予防効果を紹介する。特にダイチロナのコロナワクチンにおける役割についても解説したい。

COVID-19 が呼吸器感染症の一つとして定着する中、重症化リスクを有する患者への介入と社会全体へのリスク低減のバランスが求められている。本講演では、最新の知見をもとに実臨床に即した COVID-19 診療の実践を共有する。